

久野那美

紙袋を持つ男(紙袋)
何も持たない男(何も男)
黒い靴の女(黒靴)
白い靴下の男(白靴下)
窓の外を見ている女(窓)

※黒い靴の女が登場する回と白い靴下の男が登場する回がある。
台詞は一部を除いて共通している。台詞が異なる部分のみ、二段表記にしている。

齋場。 中の一室。

待合室だろうか。
大きな窓のある部屋に椅子がいくつか置かれている。

じつと窓の外を見ている女がいる
窓の外には大きな煙突。
もくもくと煙が上がっている。
窓の外から時折、不思議な機械音が聞こえてくる。

時マドアをあけて入ってくる人がいる。
でも皆すぐに出ていってしまう。
ということは、ここは待合室ではないのか?
なんの部屋だろう。

旅行かばんを持って紙袋をたくさん下げた男が入ってくる。とても疲れた顔をしている…。窓の外を見ている女と目が合う…

紙袋 ここ…禁煙ですか?
窓 ここ…き、禁煙?!
紙袋 そうか…。うん。
窓 えっと…。
紙袋 最近厳しいですね。
窓 厳しいですか。
紙袋 ここ空いてますね。
窓 ?
紙袋 あっちの部屋ひとが多くて。
窓 ……

紙袋を持つ男、腰を下ろし、荷物を置く。
紙袋を開いて中から本を取りだす。古い本だ。
ぱらぱらめくってみる。

窓の女、息をひそめてそれを見ている。
しばらく。

紙袋 そんなに一生懸命見られたら読めない・・・
窓 すいません。(目をそらす。)
紙袋 いや、そんなに一生懸命そらされても・・・読めないなあ。
窓 すいません。
紙袋 (女が荷物を何も持っていないことに気づいて) ああ。ここ宿泊できるんですよね。
窓 ・・・。
紙袋 そうすればよかったな。
窓 ・・・。
紙袋 遠くからですか？
窓 はい。
紙袋 いいですよ。この辺。
窓 え？
紙袋 向かいの角に有名なてんぷら屋があるんですよ。なんて名前だったかな・・・
窓 詳しいですね。
紙袋 うん。地元だから。
窓 ・・・。地元！！
紙袋 ?(なぜ驚く?)。 すごい久しぶりなんですけどね。ぜんぜん変わってない・・・。
窓 ・・・。
紙袋 そうですか。
紙袋 古い街だから。今更そんなに変わらないんですかね。
窓 そうなんですか？
紙袋 このへん初めてですか？
窓 はい。様子がわからなくて。習慣とかぜんぜん違うみたいだし。
紙袋 外の人は戸惑うみたいですね。僕はもう慣れちゃってよく分からないんですけど。
窓 独特ですよね。
紙袋 (そうかな?)。：：みたいですね。

会話が途切れる。

紙袋 すごい花届いてましたね。
窓 すごい花？
紙袋 す・・・すごい大きい花が、すごいたくさん。
窓 ああ。
紙袋 あれ、名前・・・変ですよね。「点々倶楽部」？「濁点の会」？「ドット&ドット」？「DOT」・・・って・・・点々ついてればなんでもいいのかよ？って・・・。
窓 名前変ですか？
紙袋 (失言?) いや・・・まあ、変では・・・ないかな・・・というか・・・あなたとこの人ですか？
窓 え？
紙袋 (見たところ) 点々倶楽部？
窓 なぜ？
紙袋 はずれた
窓 わたしはそういう、そういう関係者ではないです。
紙袋 そういう、そういう関係者では、
窓 誰の個人的な知りあいですか？

ドアが開き、黒い靴を履いた女がふらふらと入ってくる。何かに気を取られていて、二人に気づかない。：が：ようやく紙袋の男の姿を目にとめて：。

黒靴 ……！！！！！！………どうしてこんなところに……？

紙袋 え？いや……いや、あっちの部屋、人が多いんで……

黒靴の女、覚悟を決めたように：

黒靴 あ、この紙袋。お忘れじゃないですか？（紙袋を差し出す）

紙袋 え？ああ………ありがとうございます。すみません。（とても迷惑そう……）

黒靴の女、紙袋の男を見ている

紙袋 あ。いや……。葬式に来てこんな紙袋を渡されると思っただけで……

黒靴 何かに入れたほうがいいような気がしたんですけど、そんなのしかなくて……

黒靴（白靴下） どうしてそんなにたくさん紙袋をもっておられるのですか？

紙袋 本を紙袋に入れて返すのが流行ってるんですかね？

黒靴（白靴下） ぜんぶ本ですか？

紙袋 なんて僕に返すんだかさっぱりわからない。

黒靴（白靴下） ……今日先生が来られることがわかってたんですね。

紙袋 黒靴（白靴下） ここですよ。本に書かれてる、煙の見える窓。

紙袋 黒靴（白靴下） 今日の式も本の中と同じでした。棺に百合の花を入れてました。

紙袋 誰が言うんですか？宗教なんかなくても葬式はできますよ。同じこと信じてるからって同じように死ぬわけじゃないし。

紙袋 送るほうだって実はみんなぜんぜん違うことを考えてる。

紙袋 黒靴（白靴下） はい。

紙袋 黒靴（白靴下） だからせめて手続きくらい人と同じにしたい。

紙袋 ……そのための式でしょ。勝手に統一すればいいんですよ。百合の花入れれば別に百合じゃなくても、好きだった花を入れたらいいんじゃないかな。

紙袋 黒靴（白靴下） 彼女は、百合の花が好きだったんですね？

物陰から白い靴下の男が現れる。部屋のドアは閉まっている。いったいどこから入ってきたのか……？？？

白靴下 あ……

紙袋 （突然現れたので驚く）え……！？

白靴下 あ。あの、もしかしてこれ。（紙袋を差し出す）お忘れじゃないですか？

紙袋 ……

白靴下 （中から本を取り出して見せる）

紙袋 ああ……

白靴下 やっぱ。すみません。ずいぶん長い間お借りしてしまっただけで。家の者が今日先生にお返しするために持ってきたと思うんですけど……そういう約束だったらしくて……でも……

紙袋 ああ、さっき、ええ………すみません。葬式に来てこんなに紙袋を渡されると思っただけで……

紙袋 別に……好きじゃなかったと思うけど。
黒靴／白靴下 ……
紙袋 花だったらなんでもいいんですけど
黒靴／白靴下 ……
紙袋 植えてあるやつじゃなければ。
黒靴／白靴下 植えてあるやつはだめなんですか？
紙袋 (じっと見る) ……だめなんじゃないかな？
黒靴／白靴下 なぜ？
紙袋 だめでしょう。

問

黒靴／白靴下 ちゃんとお返しできてよかったです。
紙袋 返すものにも僕が貸したわけじゃないし。
黒靴／白靴下 でも、読み終わったら先生に直接返してほしいって。
紙袋 そんなこと言われても困りますよね。第一どうやって返すんです？
黒靴／白靴下 きっと、今日ここに持っていけばいいって。
紙袋 あの一ひとは……(紙袋の束を見て)……自分の葬式をなんだと思ってるんだ。
黒靴／白靴下 (紙袋の束をみている) ちょうどよかったです。今日、ここでお会い
できて。
紙袋 ……
黒靴／白靴下 あ。ちょうどよかったっていうのは、そういう意味ではなくて、えっ
と……
紙袋 17年
黒靴／白靴下 ？
紙袋 ちょうどよかったのかもしれないですね。
黒靴／白靴下 いい本ですね。
紙袋 ……そうですか？
黒靴 私はこの本を5年前に読みまし
た。
紙袋 へえ。
黒靴 として3年前に読みました。
紙袋 はあ。
黒靴 それから去年読みました。
紙袋 それはどうも。
黒靴 さっき、もういちど読みました。

白靴下 僕はこの本を、5年前に読み
ました。
紙袋 へえ。
白靴下 としてすみません。さっき、も
ういちど読みました。

紙袋 えっと・・・
黒靴／＼白靴下 あんなことが書いてあったんですね。
紙袋 ……え？
黒靴／＼白靴下 だからたぶん、もう読まないです。
紙袋 ……！
黒靴／＼白靴下 あ、読まないって言うのは、そういう意味ではなくて、えっと…
紙袋 ……
黒靴／＼白靴下 とても、いい本です。
ふと気づくと窓の女がふたりのやり取りをじっと見ている。

紙袋 (窓の女に) 小説とか読みます？
窓 え？
紙袋 小説。
窓 えっと…
紙袋 ……
窓 小説なんですか？
紙袋 (うん)
窓 ぜんぶ？
紙袋 ぜんぶ。
窓 面白いですか？
黒靴／＼白靴下 おもしろいんです。
紙袋 おもしろくないです。
窓 ええ！？面白……くないんですか？
紙袋 おもしろくない。
窓 そんなに？
黒靴／＼白靴下 そんなこと(ないです)
紙袋 そんなに…
窓 ……
紙袋 僕を書く小説は、読者に全然受けない。
窓 小説を書いているんですか？
紙袋 うん。これ(椅子の上に並べて見せる)
窓 全部あなたが書いたんですか？
紙袋 うん。貸してなかった本が17年ぶりに返ってきたんですよ。
黒靴／＼白靴下 ……
窓 すごくいい…
紙袋 すごくない。これも売れなかった。こっちも売れなかった。こっちのも、こっちのも…
窓 難解なんですか？
紙袋 どうして？
窓 難解な小説は売れないんでしょう？(得意げに)
紙袋 逆？
紙袋 難解じゃなさ過ぎるんだよ。書いてあることしかわからないから、奥行くと深みがなさすぎるんだってさ。
窓 書いてあることだけがわかって何が問題なんですか？
紙袋 違うんだよ。小説っていうのは。本当は、書いてあることの裏に、作者の思想や思い、人生や社会に対するスタンス、……いろんなものが隠されているはずなんだ。
窓 へえ。
紙袋 (ため息。白靴下から返却された本をばらばらめくる)

窓 その本には、裏にどんなことが隠されてるんですか？

黒靴／＼白靴下 (何か言いかける・・・が)

紙袋 (ふたりとも無視して) ある星に、二人の男と一人の女がいる。三人はとある任務を負って宇宙船に乗って、遠くの星へ旅立つ。

窓 とある任務ってなんですか？

紙袋 (無視して続ける) 長い旅の末に、たどりついた星で仲間のひとりが死んでしまう。

窓 どうなるんですか？

紙袋 どうにもならない。ふたりは、仲間が再生するのを待った。

窓 … (何か言いたそう)

紙袋 彼らの星には「とりかえしのつかないおしまい」というものが存在しないんだ。終わっても、しばらく待てばまたもとの状態に戻る。なんでもそうだと思っていた。

窓 !

紙袋 だけど、ここではそうじゃなかった。待っても仲間は再生しなかった。

窓 !

紙袋 残されたふたりは困る。いつまで待っても再生しない仲間を前にしてると、とりかえしのつかない嫌な気持ちがかみ上げてくる。すごく困る。そんな状況を想像したこともないから、何が起ってるのか、どうすればいいのか、なにもわからない。

窓 わからない！

黒靴／＼白靴下 わからない…

紙袋 そのままだけでも何も解決しなかった。でも、そのとりかえしのつかない気持ちでなんとかするために何かしないといけない、ということだけはわかった。だから彼らはその星の習慣に従うことにした。

意味も理由もわからないまま、教わったとおり、ひとつひとつ具体的に真似をした。ただ真似をした。目の前にいるひとりの真似をした。

窓 !

紙袋 それは、「吊う」という手続きだった。

「吊う」というのは難しい手続きじゃなかった。びっくりするほど簡単だった。意味も理由もわからなくても、そのとおり真似ればちゃんとできた。意味も理由もわからないまま、みんながやるままに「吊う」た。

窓・黒靴／＼白靴下 吊った…

黒靴／＼白靴下 教わった通りに、棺に百合の花をいれる場面がありましたね。

紙袋 ! その様子を詳細に描いた前衛的な小説。(窓女に本を渡す)

間

窓 この小説にも、書いてあることの裏に、ほんとは違うことが隠されてるんですか？

紙袋 小説だからね。

窓 どんなことですか？

紙袋 どんなことでしょうか？

窓 (え?) … とりかえしのつかないこと? … 吊うこと? … 意味がわからなくてもいいから棺に百合の花を入れること。

紙袋 そのままじゃん。

窓 もっと裏があるんですか？

紙袋 小説だからね。

窓 (なぜかムキになる) 小説のことはよくわからないですけど、その主人公と同じような状況のひとつがその小説を読んだら、きつと、とっても役に立つと思えますよ？

紙袋 そんなひとたちがたまたまこの小説を読んだりしない。だからそんなピンポ

イントな読者に向けて小説は書けないよ。小説は、そういうものじゃないからね。黒靴、白靴下、役に立ちましたよ。意味も理由もわかってたと思うんですけど。窓、吊ったら、なにが解決するんですか？黒靴、白靴下、何も解決しない。終わらないことは解決しないです。解決しないまま、そのまま、なじんでいくのを待つんです。解決しないまま、窓、何が何に（なじんでいくのですか？）

男がもうひとり入ってくる。彼は手に何も持っていない。

何も男 ああ。ここでしたか。

紙袋 あ。・・・あっちの部屋、人が、多くて

何も男 人多かったですね。

紙袋 人多いところ苦手なんだよ。

何も男 ここ穴場ですね。こっちは、たばこ・

紙袋 こっちも禁煙だって。

何も男 ああ喫煙室じゃないんですね。

紙袋 うん。

何も男 なんの部屋ですか？

紙袋 さあ。

何も男 入っても大丈夫ですか？

紙袋 入ってるけど大丈夫みたい。

何も男 さっきはどうも・・・

紙袋 いやいやいやこちらこそ。

何も男 お会いできて光栄です。

紙袋 とんでもない。

何も男 先生の噂は、以前から・・・

紙袋 噂は、

何も男 えっとですね・・・

紙袋 あ。話さなくていい・・・

窓女は端の席へ座り、小説を読み始める。

何も男 ここ、いろんなサイズの部屋があるらしいですよ。

紙袋 へえ。

何も男 全宗教対応可能だそうです。

紙袋 あのひとは宗教が嫌いだった。どんな宗教も嫌いだった。

何も男 そういえば焼香しなかったですね。宗教なくても葬式ってできるんですね。

キリスト教じゃなくても百合の花を使うんですね。

紙袋 べつに百合じゃなくてもいいんじゃないかな。

何も男 そうなんですか。

紙袋 知らないけど。

紙袋 ひととはどれくらいで燃え尽きるんだろう。

何も男 あと1時間くらいだそうですね。

紙袋 何十年もかけて熟成して、1時間で焼却。切ないね。

何も男 僕はそれくらいがいいです。あんまりじっくり焼かれたくない。

紙袋 そう。

何も男 あんまり長時間拘束して、「まだ焼けないのかよ？」ってイライラされるの

は嫌です。

紙袋 そう？

何も男 すいませんこんな紙袋しかなくて。

紙袋 いやいや。

何も男 あれ？でも僕がお渡ししたのはひとつだけですよ？どうしてそんなにた

紙袋 ……へえ。
何も男 僕らにとつて、先生は伝説の存在ですから。こんな形で適ってしまつて…
いえでもこんな時にお会いできてよかったです。…いい本ですね。

紙袋 それはどうもありがとうございます。

何も男 扉のうらに書いてある文章が、僕はとても好きです。

紙袋 ?

何も男 「その物語には役がふたつある。だから登場人物はふたりいる。ふたりは自分がどちらの役なのかわからないまま物語に登場する。彼らがこれから経験することを誰も知らない。分かっているのはふたりの利害が絶対一致しない事。終わつた瞬間に物語の内容と結末が決まる。配役はその時初めて明らかになる」

紙袋 そんなこと書いてたっけ。
何も男 これ、ポエムみたいに見えますけど、点転を知ってる人間にはすぐに、そのまま点転の説明なんだからわかります。

紙袋 そう？

何も男 短かい期間にひとりでのこの国の点転をここまでにした師匠はすごいと思ひますけど、でも、師匠がずっと經典みたいに頼りにしていたのは、先生のこの本です。

紙袋 ……そう？（腑に落ちない）

紙袋 へえ。あのひとつからそんな…

何も男 ……

機械音がする。しばらく。

紙袋 ……ちよつと待って。君が今やっているのはなんていう競技？

何も男 点転ですよ。

紙袋 点転…あの、点々の点に転がるって書く？

何も男 はい。子供のころに出会って、十年。僕はいつも点転を通して世界を見てきたんだと思います。

紙袋 点転を通して世界をみたら何が見える？

何も男 なんの試験ですか？

紙袋 （じつと観ている）

何も男 点転は盤上競技ですけど、盤の大きさに規定がないじゃないですか。

紙袋 盤の大きさに規定がない！

何も男 確かに僕たちはこれくらいのおおきさの盤を使いますけれども、それは、ルールというよりは僕たちレベルの棋士が参加する国内大会の運営上の事情です。それは、この国の点転のレベルがまだその程度だからで、外国ではもっと大きなというか広い盤を使って試合をします。

紙袋 ……

何も男 野球場、ゴルフ場、飛行場、いえ、モンゴルの草原のような広大なスペースを使って点を打ち込み合う…伝説の名人クラスでは海を越え、国境をまたいで闘うとか。

紙袋 ……

何も男 果ての見えない世界で、頼れるのは自分と相手と点だけ。

点にはあらかじめ名前をつけることができます。まだどこにも打たれていない点はただの点です。

自分も、相手も同じです。何が起こるのか、始まる前は誰も何も知らない。

点を打ち込む。打ち込まれる。

ただの点だった点が一ひつと、何かの点になっていく。最初から全部決まっていたかのように説明できる。

何も男は窓を開け、遠くへ点を打ち込んで見せる。

慎重に距離を測り、狙いを定めて何発も、何発も、点を打ち込む…

何も男 僕は点転を始めて、待つことを覚えめました。今何が起きているのかわからないときは、次に何かが起こるのを待つようになりました。肝心なことはいちばん最後にやってくる。それを決して見逃さないように待とうと考えるようになりました。

問

紙袋 ……なかなか難しいことを言うね。

何も男 難しいことはなにもないです。点転をやっていると、自分が見つけたことを言葉にして誰かに伝えたくなくなるんですよ。どうしてでしょうね。言葉のない世界だからですかね。扱うのが点、だからですかね。

紙袋 扱うのが、点……ちょっと話を整理するけど。君は点転の棋士なの？

何も男 アマチュアですが。

紙袋 そして、プロになろうとしている？

何も男 できれば。いえ、でも……

紙袋 (お前のことは今問題ではない)ということとは、プロというものが存在する？

何も男 もちろん。

紙袋 ということは、点転？の棋士はほかにもいる。

紙袋 プロの棋士もいる？

何も男 3年前にプロができました。

紙袋 新しい競技なの？

何も男 (なぜそんなことを聞かれてるのかわからないまま答える) 古くからさかんな国もあるみたいですけど、国内ではまだまだ。3年前に協会が、2年前に公式

紙袋 君はいつ始めたって？

何も男 10年前です。

紙袋 どういうきっかけ？

何も男 最初は……ふつうに子供向けの教室で

紙袋 つまり、子供向けの教室がある？

何も男 大人向けのものもあります。

紙袋 点転だよね。

何も男 点転です。

紙袋 あの本……何か？

何も男 あの本。読んだんだよね。

紙袋 どう読みました。

紙袋 どう思った？

何も男 感動しました。

紙袋 それはどうもありがとう。

紙袋 どこに感動したの？

何も男 先生の書かれたこの本は。一般的な指南書とはだいぶ違います。

紙袋 指南書……

何も男 こういふ指南書って、多かれ少なかれ、書き手のエゴがみえてしまうもの

だと思っんです。競技について語っているつもりでも、ついつい、おのれの人生哲

学について語ろうとしてしまう。

紙袋 ……

何も男 でもあの本には点転を始めるために必要なことだけが書かれていて。点転

という競技のルールと、点転の勝負に勝つことと負けることについてだけ書かれて

いる。意味も理由もわからなくても、書いてある通りに、ひとつひとつ具体的に手

続きをふんでいけば点転を始めることができる。

紙袋 ……そう

何も男 それがどれほどすごいことなのか、今はわかりません。

点の階上演台本「・・・」

紙袋 ありえないんだよ。いや、でもありえてしまってるわけだから、もうどうしたらいいのかからなんだよ。
何も男 何がですか？
紙袋 僕は17年前にこの本を書いた。
何も男 はい。
紙袋 なんのために書いたかわかる？
何も男 点々を広めるためでしょう？強かったんですよね。先生ほどの棋士は今後50年は現れないって……。
紙袋 誰にきいた？
何も男 師匠に。
紙袋 ああ……。
何も男 はい。
紙袋 もしかしたらこれは……復讐なのか？
何も男 は？
紙袋 いやでもここまで手の込んだし、しかも大胆なことをする理由がわからない。いやがらせのスケールを超えている……。
何も男 何を言っておられるんです？
紙袋 僕は点々の棋士だったことはない。一度もない。

間

何も男 ええええええええええ？
紙袋 点々なんて競技は見たことも聞いたこともない。
何も男 どうしたんです？わけがわかりません。
紙袋 どうだ。僕はさっきからそういう気分なんだ。
何も男 見たことも聞いたこともないならどうしてこの本があるんです。
紙袋 見たことも聞いたこともなくとも書いたことはあるからだ。
何も男 ？？？
紙袋 それは僕が小説家だからだ。
何も男 小説家にとって、見たことと聞いたことと書いたことは別々に存在するんだ。
紙袋 ……
男 ……
紙袋 これは、点々という架空の競技の世界を通じて人間の心の裏と表を前衛的手法で描いた小説。フィクションなんだよ。点々というのは、この小説の中に出てくる架空の競技なんだよ。実在しない幻の競技なんだよ。

間

何も男 ……
紙袋 どうした？
何も男 意味がわかりません。いえ、むしろ、分かっちゃったらそのあと僕はいついどうすればいいのかわかりません。
紙袋 どうすればいいと思う？
何も男 それ僕に聞きますか？
紙袋 できることならあのひとに聞きたい。
何も男 師匠ですね。
紙袋 そうだ。
何も男 無理ですよ。

二人、窓を見る。

紙袋 逃げられた。
何も男 何から逃げたんです？

紙袋
：

何も男 つまり・・・先生は点転の先生ではなくて小説家の先生ってことですか？

紙袋 知らないよ。君が勝手にそう呼んだんだよ。

何も男 いやいやいや：この本は・・・誰がどう見てもどう読んでも・・・小説とは思えません。

紙袋 なぜ？

何も男 それは・・・

紙袋 代わりに言ってるのか？

何も男 ああ・・・

紙袋 普通、小説には描かれているエピソードの裏に、作家の思いが隠れている。

それは、社会に対する批評であったり、人間の存在というものに対するやるせない

思いであったり、限られた1度きりの人生に対する諦念や希望であったり。でも、

この小説にはそれが見えない。厚みも深みもまるでない。清々しいほどに見えない。

ただ、点転のことだけが哀しいほど詳細に描かれている。これを読んで分るのは点

転のことだけだ。つまり、小説として読む価値が全くない小説なんだよ。

紙袋 そういうことだろ。

何も男 、別にそういうことを言いたいわけではありません。確かに、結果的には

そういうことになるのかもしれないよ。でもほんとうなんですか？

紙袋 嘘だったら、いいなあ。

何も男 すいません。でも・・・でも・・・

紙袋 ？

何も男 いやいやいやでもやっぱりおかしいでしょう。じゃあ、どうして、その架

空のエピソードの中の競技が、この国で発展して、協会ができて、公式大会ができ

て、プロにもアマにも棋士がいて、僕はこの競技に出会ってしまったんですか？僕

には何の才能があって、何の才能がないんですか。やっぱり、そんなのおかしいで

すよ。

紙袋 おかしい。僕もおかしいと思う。むしろ僕にいちばんおかしいと思う権利が

ある。

何も男 先生も困るでしょうけど、僕も困ります。17年ですよ。今更そんなこと

言われて、今更どうすればいいんですか？

紙袋 知らない。小説っていうのは、小説を読んだ読者が物語の裏にあれやこれや

を読み取って自分の人生や世界について考えを深めることを目的に書かれるんだよ。

いや、そんな読者は読者でさえない。

何も男 でも、物語の裏に人間や世界についてのあれやこれやを読み取って

自分の人生や世界について考えを深めることができないう小説だからこういうこと

なってしまうわけではないですか？

紙袋 僕に責任があると。責任をとれど？

何も男 そんなこと言ってます。

紙袋 そんなこと言われた方がまだよ。僕は小説家だよ。小説家が小説を書いた

んだよ。それを、嫌みでも批判でもなく、「小説だとは気づきませんでした」？その

証拠に、余計なことの書かれていない素晴らしい指南書だと思ってる本で学んで

しまいました？人気が出て協会までつくってしまいました？今ではたたくさんの棋士

やファンがこの競技を楽しんでいます？人生を賭して、迷い悩んでいる者もいま

す？って？？？

何も男 落ち着いてください。

紙袋 落ち着かせてくれ。

何も男 ・大きく息を吸ってみましょうか。はあうっ

紙袋 そういう場当たりのな解決を求めてるんじゃない。

何も男 すいません。

紙袋 なんて、今頃、なんで、これは罰なのか？

何も男 なんの罰なんです？

紙袋 ありえないほど才能がないのに誰も感動できない小説を書き続けてきた罪に

対する罰。
 何も男 そんな罪はありません・・・
 紙袋 あるいは・・・
 何も男 あるいは？
 紙袋 いや。。。。
 何も男 すみません：うわ：いや、でも、あなたに謝ると、今度は僕が切なくなり
 ます。どうしたらいいでしょう？
 紙袋 何もしないでほしい。そして、できることなら全部なかったことにしてほし
 い。
 何も男 それは僕一人の力では無理です。
 紙袋 じゃあ黙ってて。事態はここで話しあってどうこうなる範囲をとっくに超え
 てるんだよ。
 何も男 はい・・・
 紙袋 (ため息をついている)

何も男、何もしないで黙っている。
 しばらく。

何も男 (キッとにらみつける)
 何も男 説明させたいの？なんのために？
 紙袋 ぶん・・・いえ・・・何か、解決の糸口を・・・
 紙袋 ぶん・・・いえ・・・いかに？自分の、なけなしの最後のプライドが粉々
 に吹き飛ばされたようにつらいよ。
 何も男 なるほど
 紙袋 わかるなよ。わからないだろ。わからなくていいよ。こんな時でさえ、こん陳
 腐な表現しかできないんだよ。
 何も男 いいえ。。。わからないことはいいです。
 紙袋 (中途半端な同情に殺意)
 何も男 あ、違います。
 紙袋 書き続けてきた。
 紙袋 売れないのはいい。奥行と深みが無い。いや、それもいい。誰からも求められ
 ない。そう、求められないんだよ。
 何も男 そんな・・・
 紙袋 (お前が言うな。)
 何も男 すいません。
 紙袋 才能とは自分を信じ続ける力のことなんだよ。俺は信じてるよ。つまり才能
 だよ。才能あるから続けられるんだよ。だからやめない。やめていく奴を横目で見
 てた。やめていく奴をちよっと斜め上から横目で見てた。信じているから絶対にあ
 せたりしなかった。頑張りすぎないよう気をつけてた。がんばりすぎるとがんばら
 ない手に入らないものを無理矢理追いかけてるような気がしてくるから。余裕
 がなくなると追い詰められるから、追い詰めないよう余裕をもって人生に向き合
 った。キャパも小さいのに余裕なんか持つからいろんなチャンス逃した。何を
 逃しても笑顔で送った。どんな笑顔でもどれくらいどこにおけて作ったか、ぜんぶ
 覚えてるよ。だって俺は笑ってたんだから。
 何も男 自分を信じて続けていると、そういうことがどんどんうまくなるんだよ。
 紙袋 。。。。
 紙袋 あの人のことはずっと大嫌いだった。
 何も男 え？
 紙袋 彼女は。。。君の師匠だったんだ。。。。
 何も男 。。。えっと。。。あの。。。あなたは。。。なぜ？。。。どう。。。ですか？
 何も男 は猛烈に混乱している。

背後から突然、思いがけない声がある。

黒靴／＼白靴下 あのだ！

全員 ……

黒靴／＼白靴下 口を出していいものかわからなくてずっと黙ってたんですけど…
紙袋 えええええ？
こんなに長い間黙ってたんだから、もうちょっと黙っててくれますか？

黒靴／＼白靴下 ……でも。

紙袋 それにあなたこの件に関係ないでしょう。何も知らないひとに口を出されたくない。当事者にしかわからないナイーブな問題なんです。

黒靴／＼白靴下 でも私は全く関係ないわけではないですし、なにも知らないわけでもないです。

何も男・紙袋 ええっ？

何も男 ……関係者だったんですか？点転の…？

黒靴／＼白靴下 関係者じゃないです。でも この本をここまで読んで、ここまで話を聞いてしまったからにはさすがに何も知らないというわけにはいきなくなりました。無関係でもいられなくなりました。私にも言いたいことがあります。

何も男・紙袋 言いたいこと？！

黒靴／＼白靴下 私は本を返しに来たんです。

紙袋 ですから僕は貸していません。

黒靴／＼白靴下 (無視) 待ってればなじんでいきます。なじんでいきました。でも、前と違うもの。前と同じようになじんでいる自分は何かのつじつまが違ってない気がするんです。以前はそんなふうになじんでいかなかったんですけど今は考えるんです。

何も男 なんの話ですか？

黒靴／＼白靴下 だってまだここにいるような気がしてしまう。そんなはずはないのにそんな気がしてしまう。

紙袋 えっと…

黒靴／＼白靴下 つじつまを合わせたいんです。

何も男 だから口を出さずですか？

黒靴／＼白靴下 だから本を返しにきたんです。読みたいって読んでるわけじゃないのになのに！今わたしは別の本を読んでるんです。読みたいって読んでるわけじゃないのに成り行きで読んでしまったんです。もうこんなに。もう少して読み終わります。

紙袋 ……

黒靴／＼白靴下 あ。読みたくて読んだわけではないというのはそういう意味ではなくて…

紙袋 ……

黒靴／＼白靴下 なのにな…！とても…いい本です…

紙袋 ……

黒靴／＼白靴下 私は、点転に出会うために今日ここにきたわけじゃないんです。

紙袋 ……

黒靴／＼白靴下 なのになこんなことになってるんです！

何も男 気にすることないですよ。点転との出会いはひとの数だけあるんですから。

黒靴／＼白靴下 (何も男をきくと睨む。) そんな私の立場から言わせてもらおうと。

紙袋 ……あなたの立場？？

黒靴／＼白靴下 いったい何が問題になってるのか、さっぱりわかりません。

何も男・紙袋・窓女 ……？

黒靴／＼白靴下 点転が小説の外に実在したらなにがだめなんですか？

何も男 いや、ことはすでにそういう問題じゃなくなってるんです。

黒靴／＼白靴下 いいえ。そういう問題です。先生は小説家ですよ。小説家は小説を書いてるんですよ。

世界を作った、どこにもなかったものを、まるで最初からあったかのように読者に信じさせるために、工夫をこらさずにはいられない。

紙袋 小説だからね。

黒靴／＼白靴下 小説ってそういうものですよ。

紙袋 小説はね。
黒靴／＼白靴下 嘘だと思ってほしくて嘘っぽく書くわけじゃないですよね？
紙袋 何が言いたいんです？
黒靴／＼白靴下 まるであるかのように信じさせるためにまるであるかのように書いたものがまるでを超えてほんとうにあるかのように思われるばかりかほんとうにあるところまで行きついたら、これは小説の完全勝利じゃないんですか。読者がその小説を読んで自分の人生に具体的に役にたてて、何がいけないんです？どうして、先生はまるで敗北したかのような言い方をするんです？
紙袋
黒靴／＼白靴下 実は現実化したら困ることを、まるで現実であるかのように書いてたんですか？
紙袋 ……それは詭弁だ。争点はそこじゃない。
黒靴／＼白靴下 誰が誰と争ってるんです？
紙袋 ……
黒靴・白靴下 先生の小説が書かれなければ生まれなかった世界が確かにあって、そこで生きていくひとたちが確かにいるんです。その場所が小説の中でないことがそんなに問題ですか？
小説の外にあって、その中に間接的に小説の読者が存在するのではダメなんですか？

何も男はうなづいている

黒靴／＼白靴下 それに（何も男のほうに向きなおり）あなたにとってさらにはたいした問題ではないと思います。
何も男 ええ！？
黒靴／＼白靴下 まあそういうこともあるかもしれない、と思って黙ってればいいことじゃないですか？
何も男 ……（黒靴・白靴下を見る）隠ぺい工作するってことですか？
黒靴／＼白靴下 何もしないってことですよ。
何も男 ……
黒靴／＼白靴下 そもそも、それが小説じゃなかったら何が違ってたんですか？小説発祥の競技だったら誰が困るんです？
何も男 困るでしょう。僕は…
僕は点転の世界の中で自分の能力と存在価値を問われてるんです。
黒靴／＼白靴下 誰に問われてるんです？
何も男 誰って…ひとつの道を究めるってそういうことじゃないですか。
黒靴／＼白靴下 極めたいんですか？
何も男 悩んでるんです！
紙袋 プロになるんじゃないの？
何も男 あなたに言われると余計混乱します。
昔はそんなこと考えずにただ、単純に点転を信じてました。今より強くなれないことだけが不安だった。何も考えずに練習しました。だからきつと強くなった。
でも、もし点転をやっていないなかったら、って考えるんです。僕が点転をやっている間に僕以外のひとの手の中にあっただものは、ほんとうは僕が手にするはずだったものなんじゃないか。師匠はいいですよ。点転を広めて、頂点を極めてそのまま終わるまで突っ走れた…
紙袋 その言い方は…
何も男 すいません。混乱してるんです。自分に同じことができるとは思えないんです。
僕がこれまで信じてたもののがどこまでが点転でどこまでが師匠なのか。
点転は盤の大きさに規定がないです。
自分にちょうどいい盤を使っていくら強くなくても頂点までの道のりに見当がつかない。そもそも頂点があるのかどうかもわからない。自分がいったいどれくらい強

いのか判断する基準がない。
強いといわれてそうなのかと思って、もっと強くなりたいと思ってがんばって、でも、そのことがこの先どんな風に展開していくのかさっぱり見当がつかないんです。

(紙袋に) 先生に会えばわかるかなと思ったんです。

紙袋 ええええ？何が？

なににも男 点転を選んでこれまでやってきたことは正しかったって。そしてこれからも続けていく理由が。

紙袋 だから点転なんて競技は存在しないんだってば。

何も男 なのにそんな答が返ってくるなんて、いくらなんでもひどくないですか？

紙袋 そんなことを言われても…。

何も男 それではなんの参考にも理由にもならないじゃないですか。

黒靴／白靴下 でも、競技の起源なんて、いろいろあるじゃないですか。中国とかエジプトとか。

何も男 ……？

黒靴／白靴下 中国だったらよくて小説だったらだめな理由は何なんですか？いいじゃないですか。中国みたいなものだと思っていれば。

何も男 紙袋 中国は小説じゃないっ！

黒靴／白靴下 だから、例えばですよ。

何も男 たとえば中国みたいなものだと思ったらどうなるんですか？

黒靴／白靴下 囲碁とか麻雀とかと同じ種類のものになるんです。

何も男 いやそれはちゃんと存在してるし、ちゃんと歴史があるじゃないですか。

黒靴／白靴下 中国と小説をそんなにはっきり区別できるほど、あなた中国の何を知ってるんです？

何も男 そんな屁理屈を。中国のことはみんな知ってるじゃないですか。このひとの小説のことは誰も知らないじゃないですか。どこが同じなんです？

黒靴／白靴下 だからそれは、中国のことはみんな知ってるような気がしてるだけです。

何も男 ……！！？

黒靴／白靴下 中国と小説をこっそり入れ替えたって誰も気づかないですよ。きっと。

何も男 そんなわけがないでしょう！まるめこもうとしていますね。

黒靴／白靴下 あなたをまるめこんで私になんの得があるんですか。あなたのために言ってるのに。

何も男 あなたのためになって根拠もなく言う人の言葉は簡単に信用したくないです。

黒靴／白靴下 根拠を、示せばいいんですか？

何も男 え(たじろく)

問

紙袋 そうか。

何も男 黒靴／白靴下 ？

紙袋 そうか。勝ったんだ。俺。

何も男 え？

紙袋 うん。確かに、俺の小説が書かれなければ生まれなかった世界が確実にある。そのことについてもっとポジティブに考えないと。

何も男 ……僕はまだ納得がいきません

紙袋 まあ。時間がかかるよ。こういうことは。

何も男 時間の問題でしょうか。

紙袋 君にとってはね。

何も男 ……

紙袋 ただ、こっちはそうもいってられない。

何も男 ……

紙袋 負けたと思って油断したら何もかも持って行かれる。

黒靴／白靴下 どうしたんですか？

紙袋 つまりあのさ。この場合・・・著作権とか・・・ってどうなるのかな。

黒靴／白靴下・何も男 え？

紙袋 いや、つまりこれは僕の小説の「二次利用」って話だよ。

何も男 二次利用ってなんですか？

紙袋 負けたんじゃない。勝ったんだよ。こういう勝ち方をしたんだよ。それをちゃんと意識しないと、守られるべき権利を守れない。

黒靴／白靴下 こういうの二次利用っていうんですか？映画とかドラマとか漫画とかにすることでしょう？「現実化」するのにも著作権が関係あるんですか？

何も男 聞いたことないですよ。

黒靴／白靴下 だって。それだったら、ウルトラマンごっこもNGってことになりませんか？

紙袋 それは個人で楽しむ範囲でしょう。テレビの録画とかと同じで。

黒靴／白靴下 じゃあ、ドラマの先生とか救命医にあこがれて、同じような人生を歩んで中学生を更生させたり、人の命を救ったりしたら著作権侵害なんですか？

紙袋 そういう極端な話をしてるんじゃないかね。

何も男 ・・・・点転が競技として発展していくことには反対ですか？

紙袋 いや。全然。むしろありがたいと思ってる。僕の作品が小説を超えて発展していくことはすばらしいことだと思う。

何も男 ・・・・

紙袋 だけど、いやだからこそ、オリジナリティに対するリスクペクトの気持ちとか、権利の保障っていうか・・・そういうことをないがしろにされたくないわけよ。

伝説っていったよね。いってみれば俺神だよ。神に対するそれなりの接し方ってあると思うんだ。

何も男 ・・・・それは・・・

黒靴／白靴下 それって、点転の教室とか大会にはいつも先生の名前を原作者としてクレジットしないといけないってことですか？

何も男 クレジットって何ですか？

黒靴／白靴下 「この競技は〇〇原作のフィクションです。実在の競技のルールや歴史とは一切関係ありません。」って提示するんですよ。

何も男 そんなの困ります。

紙袋 だってそのとおりじゃないか。

何も男 そうですけど・・・でもそれじゃ・・・僕らはいったい何をやってるんだ？ってことになりませんか？

紙袋 それは君たちが考えることで、原作者の俺が考えることじゃない。

何も男 今後、大会が企画されたり昇段試験が実施されたりルールの改定が行われたりするたびに、先生の許可を得なければならぬということでしょうか？

紙袋 それはまあ、原作者だからね。

何も男 それは困ります。・・・なんとかありませんか？

紙袋 別の名前の別のルールの別の競技をやればいいんじゃないかな。

何も男 どうしてそんな意地悪を言うんですか？

紙袋 意地悪？

紙袋 あのさ、わかっている？君たちの正義は、僕の成果と忍耐の上に成り立っているんだけど、そのことについてはどう考えてるの？

ふたり ・・・・

紙袋 俺は負けたんじゃない。勝ったんだよ？これは当然の正当な権利なんだよ？ちゃんと、言うべきことは言わせてもらう。

何も男 黒靴／白靴下 ・・・・現実を見て、納得してもらわないと困るんだよ。

間

何も男 あのこと？
紙袋 なに？
何も男 それは・・・あまりに哀しくないですか。
紙袋 なにか？
何も男 わかりません。でもすごく哀しいです。
紙袋 そんな言葉にはひっかからない。
何も男 ？？
紙袋 要らないときは無視して、いるときは利用する。そういう考えには絶対に屈しない。
も男 そんなことは言ってもません。
紙袋 なんだよ。どっちなんだよ。俺の作品が必要なんだろ？君らの人生なんだろ？君たちにとってそんなに大切なものを俺は提供してるんだ。俺と俺の作品が必要なら、きちんと誠意を示してほしい。俺に払う当然の敬意は高すぎるか？

何も男 ・・・・

長い間。
機械音が聞こえる。

何も男 わかりました。協会に伝えます。話し合いの場を持ちましょう。

紙袋 よろしく

何も男 ただ・・・ここまで発展してしまった点転を、「実は・・・」といい感じに訂正することは難しいと思います。

原作者の存在を常に上に掲げて競技の世界が順調に運営していけるとも思いません。だから、きつと時間はかかると思いますが、協会の結論はおそらく競技自体の廃止なんじゃないかと。先生に対する補償の話もそこでできると思います。

紙袋 え？なにそれ。それでいいの？

何も男 仕方ないでしょう。あなたが創った世界なんですから。原作者の気持ちを尊重したいです。

僕は僕で、そういうことなら踏ん切りもつきます。

紙袋 ええええ？何？プロになるんじゃないの？

何も男 なれたらいいですけど、なれなかったらどうしたらいいんです？

紙袋 え・・・

この機会は僕にとっても大事な機会です。これを機に点転をきっぱり終わるか。これを機に一生点転を続けていくか、これを機に点転をきっぱり終わるか。

何も男 ・・・

皆 ・・・

何も男 これが誰かの夢なら、ためらうことなくさめることができます。

黒靴・白靴下・・・

何も男 やめるとききて、悩まずに辞めるものなんです。続けていくかどうか悩むっていうのは続けていくためのオプションなんです。続けていくかどうか悩む紙袋 え？いや、ちよっとまって。そんな早急に結論を出すのはどうだろうか。

何も男 結論って、出るときは一瞬なんです。僕も今知りました。

紙袋 どういうこと？点転はこの先消滅するっていうこと？

何も男 たぶん、そうなるでしょう。

紙袋 そんな勝手なことが許されるのか？

何も男 10年前に点転を始めて、だんだん勝てるようになって。天才少年とか言

われて。点転だけを夢中になってやり続けて。この先自分はどうなるんだろうと考えて。先のことを考えたらこれまでのことも初めて考えるようになって。先生に会いに行こうと思っ、今日ここで話して・・・

今それを振り返ってみれば、まるですべてが最初からこの結論に向かって並べられ

ていたようにしか思えないですけど、僕はつい今しがたまで、全く別の未来を考えていました。だけど、矛盾するようですけど。そんな自分は最初から最後までここにもいなかったようにも感じます。

やっぱり、すべてはこういうふうになるために始まって、こういうふうになるために進んでいたんだと思います。

紙袋 ええ？えええ？ええええええ？

黒靴／白靴下 終わらせるんですか？

何も男 終わるんですよ。

黒靴／白靴下 勝手に終わったりはしませんよ。

何も男 点転：いえ、あらゆる競技は人生の練習問題みたいなものだって言うひとがいきました。人間はみんな必ず終わるのに、それを前もって経験することができないから、終わることを経験するための。

黒靴／白靴下 それは競技だけじゃないです。

皆？

黒靴／白靴下（紙袋に） あの本、続きがありますよね。第2章が。

何も男 あの本でなんですか？

紙袋 …（無視）

黒靴／白靴下 第一章は、残されたふたりがとりかえしのつかない気持ちを持って、再生しないひとが、とりかえしのつかない気持ちを持って何かをする話。第二章は、再生しないひとが、とりかえしのつかない気持ちを持って何かをする話。

紙袋 …

黒靴／白靴下 第一章の評判はとても悪かったけど、第二章の評判はもっと悪かった。

紙袋 …

黒靴／白靴下 人生について描くことをはなから放棄しているからです。

何も男（話についていけない）

黒靴／白靴下 誰かを見送り、吊うことについて書かれた第一章は、誰かの死について、つまり自分の生についての物語です。

でも、自分が見送られ、吊われることについて書かれた第二章は何についての物語なのか。

それは 誰がなんのために読むものなのか。

何も男 なんの話ですか？誰に聞いたんですか？

黒靴／白靴下 本の話です。あなたの師匠に聞きました。

黒靴 5年前は私もそう思いました。でもきつと違うんです。意味がわからないのは別々に考えるからです。だから辻褄が合わないんです。見送った人と見送られた人は、その時からお互いがお互いの意味と理由なんです。一方がもう一方に関係なく終わらせたり始めたりすることはできないんです。

何も男 男の話ですか？

黒靴 本の話です。

白靴下 第2章の主人公と同じ立場にいるひとがこの小説を読んだら、きつとすごく役に立つと思います。(窓女のほうを見る)紙袋 そんなひとがたまたまこの小説を読んだりはしない。

白靴下 かもしれません。でもそのひとは、きつと他のどんな小説も役に立たない。いえ小説だけじゃない。誰の経験も誰の知識も役に立たない。

黒靴／＼白靴下 点転は、自分で制御できない要素が多い。だから、常にたくさんの可能性を見ている者に有利に展開していきます。そのためには常に、最も今後の可能性を狭めないところに可能性を狭めないように点を打ち込むことが必要になります。意味に沿って打つのではなく打ち込んだ場所に意味が生じるように展開させる。

皆、なぜそんなことを知っているんだという顔で黒靴・白靴下を見る。

黒靴／＼白靴下 ……、この本に書いてありました。

黒靴・白靴下 盤の大きさに規定がないってことは…

ここがいちばん端だと思ってたところの外側ももっと大きな盤の内側だってことですよ。そこにもまた点を打ちこむことができるってことですよ。点転は、実在しない架空の競技だってあなたは言っていましたけど（紙袋に）

そう言ってるのって実はあなただけじゃないですか。

現にこの国で発展して、協会ができて、公式大会ができて、プロにもアマにも棋士がいて、たくさんの人がこの競技に出会ってしまったんです。

何も男 師匠がそうしたんです。

紙袋 あの人はないをしたんだ？

何も男 点転じゃないですか？

紙袋 あの人、点転の棋士だったの？

何も男 あらゆる方向に可能性を広げて、どんな場合も必ず次の手を出してくる棋士でした。

紙袋 そう…。

何も男 最後の最後までって言いますが、師匠の場合は、誰もが最後だと思っただけであつた。

ふたり、窓突の先の窓を見ている。

紙袋 そういうひとだった。

何も男 師匠は、…、ぜんぶ知ってたんですよね

紙袋 ……、何がしたかったんだ

黒靴／＼白靴下 あなたに本を返したかったんですね。今日、ここで、ぜんぶ。

紙袋 ……、

何も男 ……、こんなにあるなんて僕は知りませんでした。

黒靴／＼白靴下 たぶん誰も。

何も男 ……、なんのために…

紙袋 ……、いろいろありますよ、あのひとのことまで考へて余裕がないよ。

何も男 ……、僕だっただけですけど…でも、今日彼女の葬式ですよ。

紙袋 ……、

機械音がする。

何も男 ……、終わったと思っただけで、案外まだ転がるものなかもしません。

黒靴／＼白靴下 ……、じゃ、どこで終わるんです？

何も男 ……、点転のルールでは、自分で終わりを決めることができるのは、負ける側です。

黒靴／＼白靴下 ……、なんで勝った方に権利がないんですか？

何も男 ……、そういう決まりなんです。「負けました」って宣言することはできませんけど、「勝ちました」って宣言はできないんです。負けなかったほうが勝者なんです。この物語はここで終わりたい、この先はない、と思ったとき、負ける方が終わりを宣言します。

紙袋 ……、黒靴・白靴下

何も男 ……、それはきくと、勝負が終わった瞬間に、勝者と敗者の見ている世界はひとつになつていくからだと思います。

紙袋 ……、黒靴・白靴下

何も男 ……、それはきくと、勝負が終わった瞬間に、勝者と敗者の見ている世界はひとつになつていくからだと思います。

紙袋 ……、黒靴・白靴下

何も男 ……、それはきくと、勝負が終わった瞬間に、勝者と敗者の見ている世界はひとつになつていくからだと思います。

紙袋 ……、黒靴・白靴下

何も男 ……、それはきくと、勝負が終わった瞬間に、勝者と敗者の見ている世界はひとつになつていくからだと思います。

紙袋　．．．．．
何も男　だから、どちらが宣言してもおなじなんです。
紙袋　じゃあどうして負ける方が？
何も男　あなたがそう書いたんですよ。
紙袋　．．．．．

チャイムが鳴る
アナウンス　ご案内申し上げます。あと5分ほどで火葬が終了いたします。ご一同様、拾骨室にお集まりください。

紙袋を持つ男、何も持たない男、無言で部屋を出ていく。

黒靴の女、白靴下の男は点転の本をもとの紙袋に入れる。ほかの本も、それぞれ紙袋に入れていく。

窓女、本を閉じて立ち上がる。黒靴、白靴下のところへ歩いていく。黒靴、白靴下に本を差し出す。

黒靴、白靴下　（紙袋をひとつ窓女に渡す。）

窓女　（本を紙袋に入れて、紙袋の山に戻す。）

窓女　ぜんぶちがう本ですか？

黒靴、白靴下　（紙袋に本を片づけていく）ぜんぶちがう本ですね、

窓女　みんなに違う本を貸してたんですか。

黒靴、白靴下　そうみたいです。

窓女　どうして？

黒靴、白靴下　ピンポイントな読者に読んでほしかったんじゃないでしょうか。

窓女　でも…小説はそういうものじゃないって…

黒靴、白靴下　小説はそういうものじゃないですね。

窓女　じゃあ…これは何なんですか？

黒靴、白靴下　…なんなんでしょうね？

窓女　…私は何を讀んだんですか？

黒靴、白靴下　何が書いてあったんですか？

窓女　とりかえしのつかない気持ちをとるかするために仲間を吊った宇宙船がふるさとの星に帰るんです。それを今度は、とりかえしのつかない気持ちをとるか

するために吊られた方の仲間が見送るんです。

黒靴、白靴下　そんなことかいてありましたっけ？

窓女　書いてありましたよ。だって私は、この本のいちばんピンポイントな読者な

んです。ほんとうに、主人公と同じ立場にいたんです…だから…

間

窓女　十七年。何を考えてたんでしょう

黒靴、白靴下　わからないです。たぶん、誰にもわからないです。

間

黒靴、白靴下　（あの小説家の先生。）今日、こんなに持って帰るものがあってよかったですね。

窓女　ちゃんと。ぜんぶ。持って帰らないと。…：意味も理由もわからなくても。

ふと。窓の外が光る。

窓女、窓を開けて外を見る。

開け放した窓の外から…空を切って何か飛び込んでくる。

そうか。これはあれだ、さっき何も男が窓の向こうへ打ち込んだ点の返りだ。

続けていくつも飛び込んでくる…

窓の向こうから、打ち込まれる、点、点、点……。
やがて静かになる。

窓女は窓枠を超えて外へ出る。白靴下はその後を追う。

窓にもたれて空を見あげる……。

点はもう打ち込まれてこない。

しばらく……

窓の向こうで何かかひそかに発進した気配がする。

器械音を立てながら、チカチカ光りながら、上空へ、上がっていく。

窓女は、窓にもたれてそれを見ている。

黒靴／＼白靴下も同じ方向を見る。

上空へ。やがてそれは見えなくなる。

ふたりは、見えなくなるまで見送っている。

終わり